



～ 思春期に寄り添う ～

校長 小木曾敏樹

思春期と言えば「反抗期」。保護者の皆さんも乗り越えてきたほろ苦い思い出の時期です。しかし、最近は思春期（反抗期）が変わってきたと言われています。早い子は小4（10歳）～遅い人は20歳過ぎまでも……。なぜなのでしょう？ ネット等の過剰な情報のせいではないかとも言われています。いずれにしても、生徒たちが思春期ど真ん中にいることは確かです。

思春期は、「自我の模索」。つまり自分さがし、自分づくりをしている時期です。親や周りの大人達によって形成された価値観を、一度崩壊させ、自分で再構築をしながら、自分の価値観で自分づくりをしているわけです。価値観を崩壊させるという行為が、親への反抗であったり、口数が少なくなるという反応であったり、悪ぶって見せるという格好や行為であったりするわけです。心の自己崩壊と再構築がこのような行為になって表れている訳です。

イライラするのに、訳はありません。たいした理由はありません。本人にも理由は分かりません。ただイライラしてしまうのです。体の成長にホルモンや心がついていけずにバランスが崩れた状態だからだそうです。イライラ以外にも、無性に悲しくて落ち込んだり、何もかもが不安になって落ち着かなくなったり、泣けてきたり、腹が立って暴力的になったりもします。どうして？とありますが、ホルモンバランスと思えば納得もいきます。

仲間意識が非常に強くなるのもこの時期の特徴です。しかし、その仲間関係は実はとても弱いもので、生徒達は無意識に不安になってしまっています。仲間からどう思われているかをすごく気にします。嫌われているといった被害妄想もよく生じます。仲間関係を維持するために、「秘密」を共有したり、「共通の敵」を作ったりして、自分たちの結びつきを強くしようとします。とても幼稚な方法で、発達段階から考えると、思春期初期、つまり小学校高学年から中学1・2年生あたりで見られる様子です。家族や勉強よりも、友人関係を優先させるという行動が目立ちます。どうしても秘密が多くなるわけです。共通の敵が「親」であったり、教師であったり、仲間の誰かであったりするわけです。仲間の誰かになってしまった場合、それは「いじめ」。いじめは中1をピークにしてその後は激減します。思春期と心の成長に、いじめ激減はぴったりと一致します。

家庭での生徒と、学校での生徒とが、全く一緒という人もいれば、全く違うという場合もあります。全く違うという生徒の中にも2種類あり、多いのが「家庭では反抗期、学校ではとてもいい子」という場合で、まれに「家庭ではよい子、なのに学校では問題生徒」という場合もあります。出しやすい方で、出しているというだけで、どちらも間違いなく生徒自身です。思春期は、この違いがかなり極端になって、家と学校ではまるで別人となるケースが多々あります。ただ、家で自分を出せないのはちょっと問題かもしれません。

これらは思春期の様相のほんの一部ですが、適切に対応して、この思春期を確実に乗り越えさせるのが、実はすごく大切な事になります。



犯罪をおかしてしまう大人や適切な社会参加が出来ない大人の多くに見られるのが、「思春期の壁を乗り越えられず、ずっと思春期を引きずって生きている」ということだそうです。思春期は、自我の模索。そして、思春期の壁を乗り越えることが、自我の確立。こう考えると、問題のある大

人は自我を確立できずに、ずっと自分さがしと自己崩壊を繰り返しているということなのかもしれません。思春期の特性に親がイラ立つのではなく、寄り添うことが大切なのだと思います。

では、私たち大人は、この「思春期の壁」を確実に乗り越えさせるために、何をしたら良いのでしょうか？



反抗期の生徒達が心の中で求めているのは、親の特別な対応ではありません。子ども扱いではない、新しい親子関係へのなだらかな移行です。

そのためには、まず「少し大人扱いする」ということ。子どもの頃は親や先生にほめてもらうことが一番の喜びだったはずですが、しかし、思春期以降は、親以外の「社会」に認められるという「社会認証欲求」というものが強くなってきます。簡単に言えば、全校の役に立ち認められたい、仲間の中で頼りにされたいといった欲求です。これまでの家庭の会話の中に、「社会（学校やクラスも含め）の中で自分をどう生かすか」といった視点をプラスすることで、これまであまり話したなかった生徒も、家族との会話をするようになります。親と子という一対一の関係に、社会・地域・学校・クラス・部活クラブといった第三の相手を加え会話することで、話がしやすくなり、興味もわいてきます。また、子供に直接関係はないニュースなどを話題にするのも意外と効果的です。簡単で効果的なのが、「未来設計図」づくりです。子の特性を生かした職業を考えたり、それがどう社会の役に立つかを考えたり、そのための学校や進路を考えたり。自分に目標をもつことが出来たとき、思春期の中の大きなトンネルを抜け出すことができると言えます。思春期には、何度か真っ暗なトンネルを通らなくてはなりません。くれぐれも、お説教にならないように。

二つ目は、時間、場所、立ち位置を考えることです。イライラしている時に正面に立っても話すはずがありません。話したくなるまで待つこと。話したくなる状況を作ることです。「日常」を避け「非日常的な空間」にする。立ち位置は「横か斜め」。例えば、夕暮れの車の中。非日常空間の横並びです。夏だったらバーベキューでもしながら少し距離をおいて。これも非日常空間であり、適切な距離感があります。子の話を「聞く」のではなく、「聴く」。つまりしっかりと耳をかたむけて、受け止めるということが大切です。「聴く」は「きく」と読みますが、「聴す」は何と読むかご存じですか？ 答えは「ゆるす」と読みます。つまり、「聴く」ときは全てを受け止め、いちいち意見することなく、子の想いを受容することが大切なのかと思います。親子の会話が成立し始めた時、思春期もいよいよ終盤へと向かっていきます。

三つ目は、「我が子のことが分からないから、誰か教えて」といった他力本願ではなく、やはり自ら知ろうとすることです。知らないが故についつい子供扱いしてしまったり、的外れなことを言って子をイラつかせたりします。学校での様子、仲間の中での様子、親が知らないうちに子供は日々確実に成長しているものです。子の友達と話したり、親同士で情報交換したりして小さな成長を実感してください。子をほめるための、認めるための話題をつかんでください。「ふだんはムカつくことが多いけど、親はやっぱり自分のことを分っているんだな。信じてくれているんだな。」そんな感覚を我が子にもたせたいものです。ホームページを是非活用してください。

大人と子供という関係が、なだらかに人と人という関係に移行していきます。いつも「なだらかな移行」を意識すると、見方や対応が変わります。

反抗期が全くないという子もいます。やたらと長い子もいます。自己肯定感・自己有用感が高い子ほど、反抗期は短い傾向にあるようです。実は子供だって反抗期は嫌なんです。逃げたいと思うのです。逃げるためにゲームやネットに時間を費やし、自分と向き合わなくてもいい、ただ単純に面白いことに逃げようとしてます。だからこそ、子供が自分自身と向き合える安定した家庭生活が必要です。学校では、逃げずに頑張っているからこそ、家庭で出てしまいます。とても常識的な思春期です。思春期が終わる頃、子育ても終わってしまいます。だから、寄り添って。